

地域政策学に対する地理学の役割と期待 —豊橋まちなかでのまちづくり活動を通じて—

駒木 伸比古

Role and Expectations of Geography in Regional Policy Study:
A Case of Community Movement Activity in the Downtown of Toyohashi City

Nobuhiko Komaki

地域政策学における基礎学問を「政策科学」とすることに、おおむね異議はないであろう。政策科学は、「社会における政策作成過程を解明し、政策問題についての合理的判断の作成に必要な資料を提供する科学」や「体系的な知識、構造化された合理性および組織化された創造性を政策決定の改善のために貢献させることに関わる科学」のように定義されている(宮川 2002, p.51)。そして、公共政策をとりまく社会科学¹⁾の領域間の相互関連性から、超領域としての政策科学の成立と展開が望まれている(宮川 1994)。

一方で、地域政策学においては「地域」の概念も重要である。今野(2008)は、住民の日常生活の空間的展開から求めた生活圏こそが地域形成の基礎であり、生活実態を反映して時間とともに動くものとしている。そして、政策まで連動して取り組むとすれば、全国的普遍的問題に起因する地域問題なのか、地域の固有の問題に起因する地域問題なのかを見極める必要があること、そして地域構造が多層化・多様化するなかで、地域そのものが全国との対比で取り上げられる一元的平面的単位ではなく、空間の構造的認識を常時正確に把握しておくことが不可欠であることを指摘している。こうした地域や空間、場所を扱う学問には社会学や都市工学、歴史学、心理学など様々な学問分野があり、公共政策の周囲に位置する多様な研究領域に位置づけられるが、本稿で

は地理学に注目したい。地理学は地域を科学する学問であり、自然環境と人間活動によって形成される人文環境からなる地域全般を広く研究対象としてきた。地誌学として特定地域の歴史や自然・人文環境に基づき地域構造や地域性、地域哲学を明らかにしたり、系統地理学として地域が共通して持つ一般的な構成要素や法則、原理などを空間、場所を視点として明らかにしてきた(戸所 1998)。したがって、地理学は政策科学において、政策が実施される地域の定義やその実態を明らかにするという役割を果たすことができると考えられる。また、伊藤(2009)は、地域を所与としてその地域について各種施策を実行する「地域で政策する」と、地域を所与の存在とすることに満足せず、さらに踏み込んで人間集団、社会と地球空間の関係の持ち方から地域を認識し、合理的かつ適正なあり方に向けての諸施策を考える「地域を政策する」の2つのアプローチを示すなかで、新しい公のあり方の検討過程で、「地域で」語るのではなく「地域を」語るることができる地理学者の貢献について期待を寄せている。

このように地域政策学において地理学の役割が示されるなかで、以下では地域政策学において重要なテーマの一つ「まちづくり」に注目する。西村(2004)は、「まちづくり」のテーマに共通する本質的な点として、「その地域に実際に住んでいる人たちが中心となって、当事者として、自分たちの住む地域に

1) 公共政策学は「inの知識」、すなわち政策のプロセス(過程)に投入される知識と、「ofの知識」、すなわち政策のプロセスの構造と動態に関する知識に分けられる(秋吉ほか 2017)。これに関連して、行政評価における地理空間情報活用に関する新たな可能性を検討した村山(2013)は、地理空間情報が「inの知識」として補助的な貢献をするだけでなく、「ofの知識」として補完的な貢献をできることを示している。

かかわる問題に関して行っている活動である」ことを指摘している。地域住民、すなわち「民」が地域課題を発見し解決に向けて活動するにあたっては、官学との協力が不可欠であろう。行政上の手続きの円滑化や資金助成などにあたっては「官」が、そして専門的な知識・技術を活用するにあたっては「学」が必要となる。そして、まちづくりに対する地理学の果たす役割には、次の三点があると考えている。第一は、まちづくりの対象となる地域における地理的特徴の明示である。まちづくりはその地域固有の自然や文化、歴史をはじめとした地域特性が色濃く反映されるものであり、全国画一的に進めることはできない。地域の実情を知り、その背後にあるメカニズムを把握することが必要となる。第二は、まちづくりの活動となる地域や場所、空間が持つ意味の提示である。まちづくりには、活動する人々の愛着や誇りが不可欠である。地域や場所、空間が持つ意味を明らかにすることで、地域住民の地域アイデンティティが再確認、涵養され、まちづくりに向けた意識の共有や明確化が可能となる。第三は、まちづくりに関連する要素間のつながりの空間的視点に基づく整理である。まちづくりは現実の地域や場所、空間において行われるが、その際、アクターやステークホルダー、地域、場所、空間といった様々な要素の位置関係、近接性によってまちづくりは推進・制限される。

こうした状況を踏まえ、筆者は地域政策学部においてまちづくりコースに関する講義・実習を主に担当するとともに、豊橋市の中心市街地を対象としていくつかのテーマを設定して研究活動を行ってきた。第一は、中心市街地における機能の移り変わりを検討する土地・建物利用調査である。土地利用の把握は、研究対象地域の動態を分析・考察していくためのファーストステップ（吉田 2013）とされる。豊橋市中心市街地の土地・建物利用を復元し、結果（地図）をまちづくりイベントなどで発表・掲示することで、来訪者にかつてのまちなかの姿や当時の思い出を喚起させたり、今後のまちなかのあり方を考えるきっかけとなる。これは、地域や場所、空間の物語を具体化する役割となる。

第二は、まちづくり団体に関する調査である。様々

に行われているまちづくり活動については、まちづくりのマネジメントを考えるうえで、その活動実態と持続的要因の検討が必要である。具体的には、まちなかや商店街を対象として活動するまちづくり団体の調査を実施した。詳細な結果は駒木（2016）に譲るが、まちづくり活動の持続要因を整理、提示することができた。また、活動の「場」の歴史や地理的特性も明らかにした。

第三は、まちあるきの実施である。地域の地理・歴史的特徴を知るには、フィールドワークによる体験が有効であり、近年のまちあるきブームは目覚ましい。中心市街地で開催されるいくつかのまちあるきイベントやまち調べイベントのオーガナイザーを担当してきた。ルートの策定やポイントでの説明にあたっては、現地調査による結果や過去の地図などを活用した。こうした活動を通じて、過去の地域の姿を学ぶとともに、参加者ごとにまちへの気付きを促してきた。

第四は、地域の場所・空間に対する“思い出”調査である。まちづくりにおいては、賛同や共感が得られるようなストーリーの構築が不可欠である。地域や場所、空間へのまなごしを踏まえて、地域アイデンティティを具体化する必要がある。中心市街地における地域や場所、空間に対する“思い出”を収集し、年齢や性別による違い、共通する場所などを考慮しながら整理した。同時に現在の中心市街地のとらえ方や、再開発などを含めた今後の中心市街地への期待についてもヒヤリングし、地域や場所、空間に対する経験（過去）と期待（未来）との関係を検討した。

こうした3つの視点および4つの活動の関係性について整理したものが表1である。場所や通り、区画がもつそれぞれの意味や役割の一部を明らかにできたのではないかと考えられる。また、「まち（地域や場所、空間）」と「ひと（住民やまちづくりへの参加者）」を橋渡しするためのプラットフォーム構築の一翼を担うことができるのではないかと考えている。

なお、都市・地域政策にかかわる地理学の人材養成への課題と期待を述べた鈴木（2006）は、地域の要素である自然・社会経済環境、さらには人々の価

表1 調査・研究・学習活動による成果の整理

地理学の役割 研究・教育活動	地理的特徴 の明示	地域(場所, 空間) の意味の提示	要素間における つながりの整理	その他(例)
土地利用調査	○	△	△	GISデータの整備
まちづくり活動団体 に関する調査		△	○	アクティブ・ ラーニングの実践
まちあるきの実施	○	△	△	地理学のアウトリーチ
“想い出”調査		○		地域の記録
その他	(地域を対象とした調査研究活動全般)			

○:直接的に関連 △:間接的に関連

値観等がどのように絡み合っ問題として顕在化するのか、ということ客観的かつ体系的に示すデザイン能力と、社会事象や問題の発生・影響の構造・メカニズムを地図を介して地域空間に定量的に表現する技術が求められており、その役割を地理学が果たすことについて指摘している。地域政策学教育においても、そうした能力や技術の習得カリキュラムを組み込んでいく必要があると言える。

最後に、地理学が地域政策学に果たす貢献として、場所や空間、スケールといった視点に基づき地域における様々な事象を分析・整理し、地域に提示することを再度強調したい。人口減少時代の政策を立案するなかで、地域資源に関しては、地域住民自らが「残す」、「壊す」、「活かす」、いずれを選択していかなければならない。その判断過程において、地理学が羅針盤の一つとなるように研鑽を積んでいくべきであろう。また、地域政策学において地理学が他の学問分野と協力してできることは何か、地理学が担当できることは何かを、具体的に示していく必要性がある。これらに関しては、今後の課題として、取り組んでいきたい。

本稿は、日本地理学会 2017 年秋季学術大会(三重大学)にて開催されたシンポジウム「地域課題の発見から解決に向けた地理学と隣接分野のアプローチ」における発表および議論をもとにしたものである。当日の様子については、秋山(2017)を参照されたい。

文献

- 秋山千重紀(2017)「地域課題の発見から解決に向けた地理学と隣接分野のアプローチ」『E-journal GEO』第12巻, 322-328頁
- 秋吉貴雄・伊藤修一郎・北山俊哉(2015)『公共政策学の基礎』有斐閣
- 伊藤喜栄(2009)「現代日本の地域政策試(私)論」『経済地理学年報』第55巻, 327-337頁
- 駒木伸比古(2016)「豊橋市中心市街地における市民主導型まちづくり活動の展開—「とよはし都市型アートイベント sebone」を事例として」『地域政策学ジャーナル』第5巻第2号, 19-35頁
- 今野修平(2008)「地域問題・地域政策・地方政府—政策と政府論からの接近」『地域学研究』第21号, 65-88頁
- 鈴木奏到(2006)「都市・地域政策にかかわる地理学の人材養成」『E-journal GEO』第1巻, 75-78頁
- 戸所 隆(1998)「地域政策学の構築をめざして—地理学的視点からの考察」『地域政策研究』第1巻第1号, 17-34頁
- 西村幸夫(2004)『まちづくり学—アイデアから実現までのプロセス』朝倉書店
- 宮川公男(1994)『政策科学の基礎』東洋経済新報社
- 宮川公男(2002)『政策科学入門』東洋経済新報社
- 村山 徹(2013)「行政評価における地理空間情報の活用に関する研究—公共政策の“inの知識”と“ofの知識”に注目して」『2013年人文地理学会大会研究発表要旨』122-123頁
- 吉田国光(2013)「土地利用調査」人文地理学会編『人文地理学辞典』134-135頁, 人文地理学会

